

2025年9月7日 礼拝説教要旨  
ヨハネによる福音書講解説教51「心の目を開かれ」  
イザヤ35：3～6、ヨハネ9：1～12

ヨハネによる福音書は第9章に入りまして、今日はシロアムの池の奇跡、イエスさまが生まれつき目の見えない人をお癒しになられた話です。しかしこの癒しの奇跡が発端となって、この後、この奇跡を巡ってある騒動が起こります。それが9章の終わりまで続きます。それは見えない人が見えるようになったという単に身体的なことだけではなくて、実は人間の内面に深く結びついていることが明らかにされていきます。信仰の目を持って物事を見るときに、その見方が変わる。それは神さまを見る。救いを見るということです。でもユダヤ人たちは見えない。だからイエスさまを排除します。しかしユダヤ人たちは、自分たちは見えていると思っている。そこに問題があります。

場所はエルサレムです。イエスさまが歩いておられると、そこに生まれつき目の見えない人がおりました。この後を読むとその人は物乞いをしていたことがわかります。おそらく道端に座り、祭りでエルサレムに集まって来る人たちに物乞いをして、それで生活をしていた。目が見えないので働くことができなかつたのでしょう。この後、この人の両親も登場してきますが、自分の息子が物乞いをしているということは両親からも見放されていたのかもしれません。ハンディキャップを負う人に対して何と厳しい社会なのでしょう。

それだけではありません。この弟子たちの言葉からも伺えるように、障がいを負っていることが罪と結び付けられています。「誰が罪を犯したからか」（2節）本人が罪を犯した結果こうなったのか。特にこの人は生まれつき目が見えない。それなら親に問題があるのではないか。そういう考え方が始まっています。こういう不幸があるのは誰のせいか。誰が悪いか。そういう犯人探しのようなことをして、その結果、こういう不幸が起こった。何でもそうですが、過去に遡って原因を追求する。それを知ることで納得しようとする。しかしそれも辛いことではないでしょうか。原因を知って、その負い目を感じながら、自分を責め続けながら、また誰かを責め続けながら生きていくことになる。おそらくこの目の見えない人も周囲から罪を言われ続け、それで自分を責め、両親を責め続けながら生きてきたのではないか。

けれども、それはわたしたちの姿をそのまま映し出しているように思います。真面目に生きて働いてきてなぜこういうことが起こるのか。なぜ我が家にはこういう不幸なことが起こるのか。それこそ病気や障がいもあるでしょう。経済の問題、事業の失敗、家族の不和、なぜこういうことが起こるのか。どうしてうまくいかないのか。それは誰が罪を犯したからか、本人か、両親か。はたまたもっと上の先祖なのか。「親の因果が子に報い」と言います。誰かのせいにすることで納得しようとする。そのようにして人生に起こる問題を自分たちの中で解決しようとする。しかしそこに希望はない。あるのは罪に対する負い目。あの時こうしておけばよかったという後悔、そして誰もその罪の責任を負いかねないという絶望です。

そのように絶望に陥るしかないわたしたちにイエスさまは言われました。「本人が罪を犯したからでも、両親が罪を犯したからでもない。神の業がこの人に現れるためである」（3節）この言葉は何を意味しているのでしょうか。この目の見えない人に対して、神さまの御業はどう現れたのか。目が見えるようになったのです。でもそれは冒頭で申しましたように、単に身

体的なことに留まらない。この後を読んでいきますと、この人は「主よ、信じます」と信仰告白をした。彼はイエスさまと出会ったのです。その救いが見えたということです。

ここで「世の光である」(5節)とイエスさまはおっしゃいました。これは初めてではありません。8章でも「わたしは世の光である」(8:12)と言われた。もっと遡ると福音書の最初のところで「その光は、まことの光で、世に来てすべての人を照らす」(1:9)とあります。そのように福音書は初めからイエスさまが光であることを伝えています。絶望しかない世界でイエスさまの光を見る。その光を見ることでなお生きる力が与えられる。この目の見えない人も絶望の中でイエスさまという光を見出す体験をした一人です。それが「神の業が現れる」ということではないでしょうか。

それにしても、ここでのイエスさまの癒しは手が込んでいます。地面に唾をして泥を作り、それを目に塗る。それだけはありません。シロアムの池に行って洗う。シロアムの池はエルサレムの神殿からは500メートルほど離れているでしょうか。自然の池ではありません。人工的に作られた池で洗い場として用いられていたと言われています。他の泉から水を引いて来て生活用水を供給するために作られた池。「遣わされた者」とわざわざ聖書が記していますが、それは水を供給する、水を遣わすという意味でもあったそうです。目の見えない人がわざわざそこまで行って洗わなければならぬ。なぜそんな手の込んだことをするのか。

カルヴァンは、イエスさまがその人の信仰と服従を試したと書いています。彼は不思議とイエスさまの言葉を信じ、それに従いました。それは彼の力ではありません。彼はイエスさまの愛を感じたのです。誰も自分のために手をかけてくれる人はいなかった。親からもほったらかしにされた。でもこの方は自分に触ってくれた。自分のために何かをしてくれる。それだけで十分嬉しかったのです。人々からは罪を責められた。お前が悪い、お前の両親が悪い。でもこの方はそうではなかった。この人の罪でも両親の罪でもないと言ってくれたのはこの方だけだ。その愛を感じたからこそ彼はイエスさまの言葉に従いました。

そしてシロアム、遣わされた者という池で目を洗ったら見えるようになったのです。この「遣わされた者」は単に池の名前ではありません。イエスさまご自身を示しています。彼はイエスさまによって、これまでの人生で被って来た泥を全部洗い流すことができた。人々の差別も偏見も、人知れず涙した辛い経験も。何より彼自身の罪を。その泥が洗い流された時に、この人はイエスさまと出会ったのです。それはイエスさまの救いを知ったということです。その罪を洗い流すために、ご自身が十字架で死んでくださった。泥をかぶってくださった。そして三日目によみがえってくださった。その救いを行われるために神さまが独り子イエスさまをお遣わしなられたことを知りました。それはこの人の人生において決定的な出来事でありました。

天の父よ。あなたがわたしたちの人生に愛を持って関わってくださることを感謝します。どうかその光を見させてください。そしてイエスさまと出会わせてください。この後、光の食卓にあずかります。イエスさまの光が見えますように。そして信仰の眼を持ってこの一週間を歩み出すことができますように。主の御名によって祈ります。アーメン。